



張愛玲『秧歌』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007725

張愛玲『秧歌』について

湯城吉信 *

On Zhang Ailing's *Yangge*

Yoshinobu YUKI *

提 要

華裔美籍作家張愛玲の《秧歌》從發表至今一直被當作反共小説來評價。《秧歌》除了描寫農民暴動以外，它的主要内容是着重在人性的描寫。一般認為這跟《秧歌》的主題一反共有密切的關係。反之，筆者認為這跟《秧歌》的主題一反共並沒有多大關係。作為政治目的的反共小説來看，《秧歌》還是不出於一般反共八股的框架。不過，在描寫人性的藝術價值面，《秧歌》跟作者的其它作品一樣，有吸引不同時代和地區的讀者的魅力。

KeyWords : 張愛玲 Zhang Ailing (Eileen Chang), 秧歌 *Yangge* (*The Rice Sprout Song*)

張愛玲の長編小説『秧歌』は、最初、1954年香港で『今日世界』という雑誌に連載された。この作品は、もともと英語で書かれ、単行本は中国語版以外に英語版も出版された。『秧歌』は発表当初から反共小説として高い評価を受けた。張は続いて『赤地之恋』という反共小説をまた英語と中国語で書き、その後間もなくアメリカに移住した（1995年に死去）。

反共小説とは、当時資本主義陣営で盛んに書かれた、共産党批判を目的とする、多分に政治的な小説である。パターン化したものが多く、それらは「反共八股」と呼ばれた。八股とは、科挙で要求された完全にパターン化された文章で、後、パターン化された文章を批判的に言う場合の代名詞となった。張愛玲『秧歌』はそのような反共八股ではない反共小説として高い評価を受けたのである（糜文開1954，司徒衛1954）。

中国では、伝統的に、文学の社会的意義が問題とされる。そこで『秧歌』でも、農民や共産党の真実の姿を描けているかどうか問題とされてきた。また、逆に、中国がわかっていなければ、『秧歌』を批評することはできないという論調も出てくる（馬叔礼1977）。『秧歌』の評価は、「中国」「共産党」という枠に縛られてきたと言える。

『秧歌』の邦訳は、1956年、『農民音楽隊』という題名で出た。これは、英語版からの翻訳であるが、翻訳の理由について、訳者の並河亮は、序文で、「現下の中国の実情を描いているのではないかとおもわれた

から」だと述べている。共産党中国の情報が少なく、また共産主義と資本主義が敵対関係にあった時代、『秧歌』は文学としてよりも、中国理解のための資料として扱われたのである。アメリカでの評価も似たようなものらしい（司馬新1996:p. 71）。中国人社会においても、外国においても、『秧歌』は実録として読まれたのである。

近年、張愛玲の死も契機となって、張愛玲が注目されているが、『秧歌』や『赤地之恋』などの反共小説よりも、日中戦争期に上海を舞台に書かれた恋愛小説集『传奇』が好んで取り上げられるようだ。確かに、東西冷戦が終結した今、その歴史的産物としての反共小説よりも、戦争期の租界上海で政治の束縛を受けずに書かれた恋愛小説の方が、現代の読者には魅力的であろう。

だが、本稿では、あえて『秧歌』を取り上げ、その主題を再考してみたい。単なる反共だけに納まるものではないと感じたからである。

なお、テキストとして『秧歌』（皇冠出版社、1968）を用いる。その他の張愛玲の著作（『赤地之恋』『流言』『張看』）は、すべて皇冠叢書『張愛玲全集』（1991）を用いた。

1、張愛玲の読者

まず、極めて私的な話ながら、一読者の反応の例として、私自身のことを述べる。私は98年の4月に初めて『秧歌』を読んだ。張愛玲の小説を手にしたのはこれが初めてである。きっかけは、たまたま手にしたと

1999年4月14日受理

*一般教養科 (Department of Liberal Arts)

いうだけだが、張愛玲が台湾では高く評価されていること、胡蘭成という政治家との恋愛、離婚、渡米など彼女の私生活が読者の興味をそそってきたこと、95年にアメリカで静かに息を引き取ったことなどは耳にしたことがあった。読んでみて興味深かったのは、共産主義、資本主義に全く何の思い入れもない私にとって、反共であるかどうかを意識することなく、人間を描いた小説として読むことができた点である。2章以下の分析は、実は私のこの感想を検証するものでしかない。

張愛玲は近年見直しが始まっているとは言え、文学史上主流と見なされる作家ではない（『中国現代文学事典』東京堂には名前すら載っていない）。だが、一方読者はと言えば、作品の発表当時から現在に至るまで常に人気を博してきた。この点について余斌が分析をしているので紹介したい（余斌1997:引用）。

余斌は、魯迅は中国文学史上高く評価されるのに「魯迷」（迷はファンの意だが、かなり熱狂的なニュアンスを含む）がいないのに対し、張愛玲については「張迷」がいると言う。つまり張愛玲は大衆作家だということなのであるが、それでは一般読者は張愛玲のどこに引かれるのか。張愛玲は作品発表当初すぐに人気を博したばかりでなく、今でも、台湾、中国大陆双方で「張迷」を獲得しているのである。大陸では張愛玲の作品は長らく禁書であったが、最近、全集も出版されている。実は、余斌もそのような大陸の張迷である。張愛玲の何が読者を引きつけるかについて、余斌は、いくつか具体的理由を考察している。例えば、

- 1、発禁処分が解かれたから（反動、喜び）
 - 2、張の描く普通の生活に親しみを感ずること
 - 3、女性である作者自身への興味
- などである。

3番目の理由については、確かに、女性であり、名家の出身で、汪兆銘政権の高官と結婚、離婚し、その後香港を経てアメリカ行き、ひっそりと余生を送った張愛玲の人生は、一般人の興味をそそるものであろう。厳浩、三毛の映画『滾滾紅塵』（1990）は、張愛玲をモデルとする映画であるが、そのような張愛玲に対する中国人の私的興味の現れと見ることができよう。

張愛玲が亡くなった翌月（1995、10）、『明報月刊』が張愛玲特集を組んでいる。そこで何人か大陸の張迷が文章を寄せている。その中で、王曉明が大陸で張愛玲ブームが起きた理由について、張愛玲の小説の内容が政治と無関係なことを挙げている。辛一寛も、現代人をも引きつける、張愛玲の小説の時代を超えた普遍性とは、日常的な人生を描いた点にあると述べている。張愛玲は、近年大陸が政治の呪縛を免れるに従って、脚光を浴びるようになってきたと言えよう。

さらに、張の小説の愛読者は中国人に限らない。戦争中、上海には十万人もの日本人がいたと言われるが、その日本人の間でも張愛玲は人気があった。しかも、読者層は多岐にわたっていた（藤井省三1991:解説p.233、浜田麻矢1992）。

また、現代の日本人について言えば、私が一例だが、中国語を解する人の中に読者はいるようだ。

以上、資料と言うにははなはだ不完全ではあるが、張愛玲の小説が、時代と地域を越えて、研究者ではなく、読者を引きつけていることを述べた。その、張愛玲の普遍性とは、政治とは無関係な日常的人生を描いた点にあるらしい。この点について、次章で詳しく述べたい。

2、『流言』に見られる張愛玲の考え—張愛玲が描こうとしたもの

1942年、戦争のため、香港大学から上海にもどった張愛玲は、「傾城之戀」などの短編小説で一世を風靡し、1944年には『流言』という随筆集も出版している。この『流言』で、張愛玲は自分の考えを比較的素直に開示している。『秧歌』の主題を分析するに先立ち、まずこの章では、『流言』に見られる張愛玲の考えを確認しておきたい。

（1）「自己的文章」—小説に対する考え

まず、直接自分の文章について述べた随筆「自己的文章」を見てみる。ここで張は、文学者が往々にして、劇的事件を題材としたがり、平凡な日常を取り上げたがらない傾向を指摘する。だが、張は日常の平凡の中に現れる「蒼涼」にこそ引かれると言う。蒼涼は張が作品の中でも好んで使うキーワードであるが、人生のものの悲しさを表す言葉である。確かに、張の小説の登場人物は、極めて普通の人物である場合が多い。

また、張は「虚偽の中に真実があり、浮華の中に素朴がある」と言う。彼女はそれらが複雑に混じり合った様子を対照的に描き出した（彼女の言葉では「参差的対照的写法」）。「傾城之戀」はその代表であろう。張の小説には、確かに混血児や没落貴族など立場上、一般庶民と言えない人物が多いが、張は、その中に、普通の人性を読みとっている（利己的で嫉妬もする極めて普通の人間であると描写されている）。⁽¹⁾これは、まさに上に書いた張の考えを体現したものと言える。

私は張愛玲の短編小説のキーワードは「理想と現実」だと考えている。普通の人間が普通の生活を幸せとし、それを目指すのにかえってとんでもないことになる

（「第二炉香」「琉璃瓦」「心経」）とか、逆に非日常体験においてかえって人生の真実と言えるような体験をする（例えば、空襲時の電車での話「封鎖」）など、理想（考えていること）と現実との乖離は張がよく描くところである。

張は普通の生活の中に現れる人生の機微、真実の人生を表そうとしたと言える。だから、張愛玲は「留情」「鴻鸞禧」「等」のように何ともない日常の中の感情の機微を描く作品も書いている。これを可能にする鋭い感性を張はどのようにして身につけたのか。それは張の個人的体験に負うところが大きいと私は考える。

（2）「私語」一生い立ち

張は自らの家庭環境について、随筆「私語」で詳しく述べている。以下、その記述に従って、張の少女時代を振り返って見る。

張は上流階級の出身であるが、決して幸福とは言えない少女時代を過ごした。自立心に富む母は、彼女が4歳の時、家族を置いてイギリスに留学する。母は彼女が8歳の時帰国し、それからしばらくは幸せな生活を送る。だが、その幸せも長く続かず、10歳の時父母は離婚する。そして、母は再びヨーロッパ（フランス）へ旅立つ。その別れの時、彼女も泣かず、一方母にも喜びの表情さえ感じ取れた。彼女は「事はこのようにスムーズに痕も残さずに過ぎていった」と述べている。物語のような泣き別れはなかったのである（理想と現実の乖離）。

そうして、父との生活が始まる。彼女の父は、典型的なぐうたらで、仕事もせずに阿片ばかり吸っていた。このような生活の中、張は母を極端なまでに理想化した。一時期、張は、父に属するものはすべて悪く、母に属するものはすべて良いというふうに物事を二分していたと告白している。この頃（12、3歳）、彼女は、メルヘン調の習作小説「理想中的理想村」を書いている（「存稿」『流言』所収）。この時期、張愛玲は自分の理想の世界に生きていたと言えよう。その後、父は再婚するが、継母との関係も悪かった。母は彼女が16歳の時再び帰国している。彼女の心が母の方にあると知った父はさらに冷たく彼女に当たり、一時期、彼女を監禁までしている。

その後、彼女は母の元に逃げ込み、夢に見た母との同居が実現される。だが、それは彼女の夢の世界とはいささか違っていた。母に引き取られて同居を始めた張は、すぐに自分が母の精神的負担になっていることに気づく。「この時、母の家もやさしく和やかなものではなくなった」と張は述べている。⁽²⁾ 張の理想はま

たしてもうち砕かれた。彼女は理想と現実が一致しないことを自ら体験したのである。以上のような不幸と言わなければならない後、『私語』は次のような文句で締めくくられる。

——愛すべく、また哀れむべきこの年月よ！

一般人には精神的ショックということだけでただマイナスにとらえられるような体験を張は冷静に、また哀惜を含めて振り返っているのである。父母に対して恨みを述べるわけでもない。人生このようなものだと看破しているのである。これが張の言う「蒼涼」であろう。人生を蒼涼にとらえる張の人生観は基本的に悲観的であると言える。だが、そのような人生に張は暖かい眼差しを向けている。小説の登場人物に対する張の見方も基本的に同じである。張の小説の基調は、このような彼女の体験に基づいて形成されたと言えよう。⁽³⁾

（3）「燼余録」—香港での戦争体験

張は、香港大学在学中に戦争を体験する。その様子を随筆「燼余録」に記している。そこで、張が記しているのは、戦争の悲惨さではない。張の興味を引いたのは、戦争時に現れた人間の本性（彼女の言葉で言うと「不相干の事」）である。

例えば、張は、戦争が起こった時学生が喜んだことを記している。始まるはずの試験がなくなったからである。学生として戦争が何物かわからないはずはない。だが、それでも試験がなくなることを知り、跳び上がって喜んだのである。

間もなく学校が臨時病院になり、彼女も勤労奉仕をした。ここでも張は悲惨さではなく、人間を記している。例えば、負傷者が注目を浴びてうれしそうにしている様子や、傷病兵が自分の傷を我が子を慈しむように見ていることなどである。

極め付きは、臀部が腐敗したある傷痕軍人の描写がある。彼女によると、この軍人は夜通し人を呼びつけた。その表情は、狂喜に満ちたものであったと言う。当直に当たっていた張愛玲はこの人に憎しみを感じ、相手にせずにやり過ごせるものならやり過ごしたかったと告白している。そして、この男が死んだ時、みんな喜び、その後は何事もなかったかのように過ごしたと言う。

つまり、「燼余録」でも、人間世界の理想（物語的あり方）と現実とのギャップが描写されているのである。理屈から考えると、戦争で悲惨で暗い時代が訪れれば、人は意気消沈しそうなものだが、かえって平時

に勝る興奮を覚えたりしている。また、けがをするのは悲惨なことだと誰もが思っているが、傷病者の方にかえって満足感が見えたりする。まさに「参差」である。絶対的な不幸も絶対的な幸福もなく、実生活はそれが混じり合ったものなのである。

「私語」に見える人間観がここで発揮されているのがわかる。

現実人は人が考える物語（理想）とは違うということをも身をもって実感した張は、それを小説で表そうとしたのであろう。そして、それに成功したところに張の小説の価値があり、現代にも通じる普遍性を獲得したと考える。

3、『秧歌』の評価

冒頭に述べたように、『秧歌』は発表当初、優れた反共文学であるとして評価された。その際、ポイントになったのは、中国の実情をどれだけ忠実に描き出しているかであった。

張愛玲の小説を最初に高く評価したのはアメリカ在住の中国人学者夏志清である。⁽⁴⁾夏は1957年「評秧歌」という論文を書いている。その中で、夏は、文芸作品として『秧歌』を評価しようとしている。例えば、夏が引用付きで高く評価するのは、金根金花兄妹の情を描き出した部分である。夏は、『秧歌』は単に共産党下の生活を描くことだけでは満足せず、共産党の統治が中国の伝統的な感性や風俗にどのような作用を及ぼしたかまで追求していると言う。また、夏は『秧歌』は「人の身体と精神が暴政のもとに踏みこまれた記録」だと言っている。以上の言説から、夏は共産党の横暴を軸に『秧歌』を捉えており、その評価は反共文学としての評価を出るものではないことがわかる。夏の論文も、「中国」「共産主義」という呪縛を免れていないのである。

一方、余斌は次のように言う。

『秧歌』は反共の立場に立つものであることは明白であるが、張愛玲の政治に対する興味は限りがあり、彼女はやはり、人間性、人情、人間関係に多く筆を費やしている。(余斌1997:p. 306)

余の論がそれまでの評論と違うのは、人間性の描写が、反共という主題に結びつくものではないとしている点である。私も同様の感想を持つ。その感想の裏付けとして、以下、基本的な分析を述べたい。

4、『秧歌』の分析

(1)『秧歌』執筆の背景

『秧歌』は1954年に香港で執筆された。これに先立つ1952年、張愛玲は、香港大学に復学することを理由に上海から香港に渡る。だが、学費を払うことができず仕事を探す。この仕事探しには苦勞したようで(52年11月から53年2月までは、定住を目指して日本にまで来ている)、共産党のスパイと間違われることまであったという(黄康顕1996, 宋明煒1996:p. 244)。やがて、無事アメリカ新聞処に雇われることになった。ここは、アメリカの出先宣伝機関であり当然反共の陣営であった。ここで、張は英語力を生かして翻訳に従事した。今、全集に入っているエマーソンの翻訳はこの頃の作品である。だが、翻訳の仕事は彼女にとって決して楽しいものではなかった。生活のために仕方なくやっていたのである(宋淇1996)。翻訳の仕事は、英語から中国語へだけではなかった。張愛玲は、依頼を受けて、『荻村伝』という反共小説(著者は台湾の陳紀澄)を英語に訳している(英語名 *Fool in the Reeds*) (余斌1997:p. 302)。

反共小説『秧歌』が執筆されたのは、その後である。その発表場所はアメリカ新聞処の刊行する雑誌『今日世界』であり、英語版もアメリカ新聞処の紹介で出版されたい(英語版の序に出版の際のマッカーシーの助けに感謝の意が述べられている)。

また、『秧歌』に続いて、『赤地之恋』が執筆された。この『赤地之恋』は、『秧歌』よりさらに露骨な反共小説であるが、これは、アメリカ新聞処から材料を提供され依頼の下に書かれたものであることは確実である(宋淇1996, 水晶1973)。

以上のように、『秧歌』はアメリカ新聞処における一連の反共作品の中に位置づけられることがわかる。

⁽⁵⁾ただ、『秧歌』と『赤地之恋』は同じ時期に書かれた小説で、同じく反共小説であるとは言え、違いもある。本稿では、その内容にまで立ち入ることはできないが、外面的なことについて述べておきたい。

まず、執筆の時の様子について宋淇が記しているが、それによると、『秧歌』の時は、張愛玲は評価に対して非常にナーバスになっていたと言う。特に、『タイム』の書評が出るのを心待ちにしていたと言う(宋淇1996)。また、胡適に送り、「その他の作品は良くないので送いません」と言っている。また、『秧歌』が反共という側面からしか評価されていないことに不満を漏らしている(「憶胡適之」『張看』所収)。ここから、かなりの自信作であったことが窺える。

一方、『赤地之恋』の場合は、新聞社の委託を受けたもので、自分の自由が利かず非常に苦しんで書かれたもので、完成後も自信がなかったらしい（水晶や宋淇によれば、張愛玲は作品が完成すると素直に喜ぶタイプだったそうなのに）。

つまり、『秧歌』は彼女の自由が利いた作品であり、出来に対しては彼女自身満足していたこと、『赤地之恋』は完全に自由が利かない状態で書かれ、出来も満足できるものではなかったことが推測される。両作品とも、彼女が生活を賭けたものであるが、前者は自分を試されるという緊張感—それは同時に充実感であった—を持って書かれたのに対し、後者は、身分保障を得た安心感—同時にそれは束縛であった—の下に書かれたのである。

なお、『秧歌』を書き上げてから、張愛玲はアメリカ行きのビザを申請し、見事手にしている。弟の張子静によれば、張愛玲は、胡適のようにアメリカで文筆活動することにあこがれていた（張子静1996:p. 133）。その夢への前進と言えるのだが、実際は悲しい旅立ちであった（宋淇によると日本に行くときは大違いだったらしい）。ちなみに、亡命としてビザが下りたらしい。

張愛玲は、少女時代から小説好きで、早くから習作を書いていた。また、内向的で人と接触することが苦手なこともあり、小説家になることを目指していた。だが、その小説は、何よりもまず生活のために書かれた。⁽⁶⁾『秧歌』とアメリカ行きを巡っても、張愛玲の理想と現実の乖離を見ることができる。

（２）序と跋

1968年版の『秧歌』には、序と跋がある。序は胡適の文章の影印であるが、これは、『秧歌』の初版本を送られた胡適が書いた文章（日付も1955年）であり、初版にはなかったはずである。一方、跋は張愛玲自身の文章であるが、英語版（日本語版から推測）では、これが簡略化された形で序として付されており、中国語版でも、初版では序であった可能性が高い。本節では、この序と跋の内容から、張愛玲の『秧歌』に対する考えを探りたい。

①跋—事実であることの強調＝反共

張愛玲は、『秧歌』の跋で、小説を解剖することによる否定的見解を見せながらも、『秧歌』の人物はフィクションであるが、話（原文「事情」）はすべて根拠がある」として、作品の種明かしをしている（このよう

に、事実であることを強調するのは『赤地之恋』も同様である）。

まず、暴動と政府の発砲弾圧については、『人民文学』に、そのような小説が載っていたという。また、飢饉については、自分が聞いた情報と新聞記事を、顧岡のシナリオについては、実際そういう映画を見たと言っている。また、6章の王霖と妻沙明の恋愛（回想）についても、新聞に連載された女性幹部の自伝に基づくと言っている。

実は張愛玲の作品は完全なフィクションは少なく、多くはもとになるモデルがあったらしい。例えば、『伝奇』にもそれぞれモデルがおり、彼女の全くの創作ではないそう（水晶1973, 張子静1996）。水晶に対して、張愛玲は『伝奇』は英語で言うとドキュメンタリーだと言っている。また、『半生縁』も筋はアメリカの小説からヒントを得たらしい（宋淇1996）。このことからすると、『秧歌』が事実に基づくとしても、彼女の小説としてはきわめて一般的なことだと言える。

ただ、『伝奇』序では、「身の回りにこのような人がいるなあと思っていたらそれでよい」と述べている。ここでは、実際そのような人がいたかどうかという個別的事実ではなく、普遍的な人間性を表現したものとして述べており、『秧歌』や『赤地之恋』で個別的事実を強調しているのとは違う。

『秧歌』の跋で、わざわざ事実に基づくと強調しているのは、それを伝えたいという意図があったからであろう。それは、当然、共産党中国の実情—悪い面の情報—を期待する読者に向けられたものであろう。

張愛玲の言う根拠の中で、『人民文学』については、私は調査してみたが発見できなかった。1952年3・4月合併号が三反・五反運動の特集号になっているが、この中に張の言うような小説はなかった。私は、張愛玲の言う根拠はいずれもかなり疑わしいのではないかと推測する。一方、彼女は、新中国になってから冬に3、4ヶ月農村に滞在したことがあり（余斌1997:p. 310, p. 308注）、それが農村描写には役立ったはずである（殷允芃1996:p. 159）。だが、それについては跋では全く触れられていない。ここからも、張愛玲は、跋では、一般的な農村、農民という普遍性ではなく、事件という個別性を強調していることがわかる。

②胡適の序—文芸作品としての評価

一方、序では胡適の文を載せるが、ここで胡適に「平淡にして自然に近く」「近年読んだ中国の文芸作品の中では一番いい作品だ」と言わしめている。この「平淡而近自然」という言葉は、実は張愛玲が胡適に『秧

歌』を送った際、副えた手紙の中で自作を自負して述べた言葉である（「憶胡適之」）。胡適は、張愛玲の自評を追認しただけなのである。この言葉は、もともと魯迅が『中国小説史略』で『海上花列伝』を評した言葉である。『海上花列伝』は、清末光緒年間に書かれた、妓女を描いた白話小説であるが、胡適、張愛玲ともに高く評価している。特に、張愛玲は後に現代語訳を出すほど気に入っていた。この小説について、魯迅は「妓女の中によい女性もいれば、わるい女性もいると考えられており、…」と述べている（「中国小説的歴史の変遷」）。つまり、清濁合わせ持つ人間の真相を描き出したということであろう。これは、先に述べた張愛玲の小説観、人間観に通じる。⁽⁷⁾

ここから『秧歌』は小説として高い評価を目指したものであったこと、またその目指す小説とは、ステレオタイプにとらわれない真実の人間の姿を写し出そうとするものだったことがわかる。そして、それは、前章で分析した、張愛玲の人間観、小説観と一致する。『秧歌』は題材、表面的意図、対象読者ともに、上海時代の短編小説と違うとは言え、作者の作品に対する姿勢は一貫していると言えよう。

このように、跋と対照的に、序では「文芸作品として優れた作品」だということが強調されている。だから、張愛玲は、胡適に対し、『秧歌』が反共という視点からしか評価されていないことについて、不満を表している（「憶胡適之」）。

以上（１）（２）をまとめる。作品制作の背景を見ると、『秧歌』は反共作品を書こうという意図の下に書かれたものだが、『赤地之恋』より自由に筆を振るう余地があり、出来に対しても満足していたと言える。序と跋はその傍証となる。私は、ここには、張愛玲の現実と理想がまさに混じり合って（参差）表れていると考える。

（３）『秧歌』の内容分析

①『秧歌』のあらすじ

舞台は江南の農村。上海に出稼ぎに行っていた月香が帰農を奨励され帰ってくる（３）。上海では、解放後、農村は豊かになったと聞いていたが、実情は全く違った。収穫は悪くなかったが、供出が多いことが原因らしい。ただ、他の村では共産党幹部の横暴に苦しむ所もあるようだが、幸い彼らの村の幹部王霖はそのようなことはない（４）。

だが、新年を迎えるにあたり、さらに供出が要求さ

れた。人民解放軍を慰労するためである。豚を飼っている家は豚を、金のある家は金を、とにかくあるものを供出しろというのである（１１）。ここで遂に民衆が爆発する。月香の夫金根らは、政府の倉庫に押し掛け、年越しのための米を要求する。そして、押し入ろうとする民衆に対し、王は銃を乱射する。茫然自失した王は「我々は失敗した」と呟く（１３）。

一方、銃を向けられた民衆はちりぢりに逃げる。負傷した金根と妻の月香も子供の阿招を負ぶって逃げるが途中、阿招がすでに死んでいることに気づく。発砲現場から逃げる途中、誰かに踏み殺されていたのである。隣村まで着いた月香は、負傷した夫を山に隠して、夫の妹金花に助けを求める。だが、金花はどうしようもない。連座させられるに決まっているからだ。食べ物だけもらった月香は仕方なく夫の所に戻った。だが、夫はいなかった。ただ、川岸に上着だけが残されていた。貴重品である上着を残して、投身自殺していたのである（１４）。その晩、政府の倉庫が燃える。その火の中には女の影が見えた（１６）。

以上、出来事を追ってあらすじを記述した。なお、上の（ ）内の数字は章を表し、以上の内容がその章に述べられていることを示している（全１７章）。ここで注目すべきは、プロットの後半への偏りである。それでは、前半、特に上のあらすじで数字の出いていない章には何が述べられているのか。まず、１、２章には、金根の妹金花の結婚の様子が述べられている。５～１０章では、顧岡という共産党お抱えの作家（文聯の映画監督）が村に来るという出来事（６章）はあるが、最後の暴動とは何の関係もなく、特に事件を巻き起こすわけでもない。食べ物のことを巡って、寄宿先の月香一家と気まずい状態になることや、地元の幹部の王霖との人間関係、心理を記すだけである。顧岡については、ただ民衆と知識人の齟齬が述べられているだけだと言える。また、最後の１７章には、暴動鎮圧後、何もなかったかのように、農民による秧歌（集団歌舞、後の「秧歌という題」参照）が繰り広げられる様子が描写されている。『秧歌』は農民暴動を素材とする小説であるが、それについてより人物描写の方に紙が費やされているのである。

ただ、注意すべきなのは、１、２、６、１２章（供出する豚殺しの描写、昔、汪政権の頃、兵士に豚を略奪されたことの回想が中心）、１７章は、分量を増やすようにとの出版社の要請により後から付け足されたもので、最初はなかったことである（「憶胡適之」）。付け足された部分では回想が多用され（２、６、１２章）、情景描写（事実）が中心になっている。ただ、

この後から付け足した部分を除いても、出来事の末尾への集中は明白である。

これについて、水晶が張愛玲に尋ねている（水晶1973）。『秧歌』の最後が事件が多くドタバタ劇化しており、小説の「抒情」基調を乱していると言う水晶に対し、張愛玲は、すぐさま「それは是非書き残して下さい。批評家は好いことばかり書いては読者の反感を招き、信用されなくなるでしょう」と答えたという。この会談の中で、張愛玲は、自分が納得できない批判には率直に反論している。だから、上の言葉も、単なる社交辞令とは考えられない。水晶の批判を認めた発言と見るべきであろう。

反共物ということで、暴動事件は入れざるをえなかったが、彼女が本当に描きたかったのは人間だということであろう。

②人物描写

先に述べたように、『秧歌』では、暴動事件よりも人間描写に多くの紙を費やしている。ここでは、『秧歌』の中心をなす人物描写について述べたい。全体を通じて言えば、3、4章で月香、6章で王霖、7章で顧岡と主な登場人物に順番にスポットが当たり、その心理が克明に記されていく。

まず、全体の主人公と言うべき金根であるが、彼についての記述は案外少ない。寡黙で妹思いの若者というぐらいである。ただ、月香とのやりとりから気は短いということはわかる。あえて言えば、状況に追いつめられ、金根と月香の関係が悪くなっていくことが後の暴動事件を暗示するものとなっている。

次に、月香であるが、彼女は夫よりしたたかな女性だと描写されている。例えば、帰郷後、たくさんの人が彼女に金を借りにくるが、彼女は金を貸さない（実は金を持っていたということは後でわかる）。また、夫の妹、金花が尋ねてきてもごちそうを出すこともしない。金花に対してはライバル意識があるらしく、たびたび文句も言っている。また、共産党のお抱え作家顧岡に対し、好意的な態度を見せるが、それも、あわよくば、自分に仕事を紹介してくれるのではないかという下心からである。彼女は、外見は美しく、また、この小説ではヒロインと言うべき人物であるが、徹底的にしたたかな女性ということになっている（この点張愛玲のその他の小説に通じる）。

このしたたかさは農民全体について見られる。民衆の譲り合いは多く描写される。例えば、譲り合った末、分かれた二人が、受け取る前と受け取り分かれた後とで表情が逆転したなどである。今の日本にも通じるよ

うな世間が描き出されているのである。

金根らの隣に住む譚大娘は小説の背景を形作る人物であるが、したたかな民衆の代表と言うべき人物である。共産党幹部が来れば率なく対応するし、結婚式で幹部の機嫌を害しそうになっても彼女がうまく取り繕っている。実は彼女は共産主義が何であるかはまったく理解していない。だから、幹部に対して、教科書的な共産党賛美の言葉を述べながら、共産党を国民党と言い間違えたりしているのである（p. 20）。彼女にとっては、共産党であれ何であれ、お上はお上である。主義がどうであれ、それは民衆には関係ない。民衆にとっては、食べられるかどうかの問題なのである。まさに「民以食为天」である。『秧歌』では、そういう改革の裏にある生身の人間を描いている。

共産党側の人間としては、地元幹部の王霖と共産党から派遣された顧岡が詳しく描写されている。

王霖は、共産主義の信奉者であるが、党のやり方に疑問も持っている。それは、昔と同様コネが横行していることなどである（p. 86）。そして、それを見過ごすことができないために、上司と衝突し、田舎の幹部に左遷させられているように書かれている。だが、この王も単に優等生と片づけられているわけではない。王について詳しく描かれるのは、顧岡に対するコンプレックスである。村に派遣されてきたエリート顧岡に対し、王は対抗意識を燃やし、嫌がらせをしたり、たいした作家ではないとわかると喜んだりしている。

顧岡については、農村にとけ込めない様子が描写されている。例えば、顧岡は、農民と同じ食事で飢えに耐えることがどうしてもできない。そこで、町に食べ物を買いに行くのであるが、それが見つかって、非常に気まずい状態になる（p. 107）。もっとも、農民らの方では、もともと自分たちと違う人間だと見なしており、その人が特別な物を食べていようが別に気まずくないのだろう。また、顧岡は、暴動が起きた時ただ茫然自失するばかりである。知識人の無能さが暴露されているのである。

③筋と人物描写との関係

さて、このような人物描写と筋との関係を考えてみよう。飢えに我慢できなくなった農民が暴動を起こすというのはわからないではないが、上に述べた人物描写とは何の関係もない（農民の飢えや金根夫婦の関係悪化が伏線というに過ぎない）。金根については、たしかに一本気で短気なところもあるようだが、先に述べたように、月香や譚大娘は、世事にたけ、争いを起こさずに事を解決していくタイプである。だが、その

譚大娘の共産党に対する不満の爆発が暴動の前兆としてまず小説に表れる（9章）。また、したたかな月香が最後には、倉庫に火を放って自分も焼身自殺する。そして、さらに張はしたたかな譚大娘に涙まで流させている（15章）。

一方、農民思いで、共産党に疑問も抱いているような王が、農民に新年の供出を強要し、挙げ句の果てに発砲、拷問（p.178）までするというのも解せない。

9章以降は、登場人物の性格が抹消されていると言える。あるいは、異常事態で人間性が麻痺したことになっているのであろうか。

このように純朴な農民でも爆発したのだとして、共産党政治の横暴を強調したのだという見方がある。だが、それはおかしい。張愛玲は、農民をただ純朴なものだとは描いていないからである。無知だが、一方したたかに生きる様子が「参差」に描写されているのである。

先に述べたように、この小説の表面的主題が反共にあることは間違いないが、共産主義そのものに対する批判は一言もない。農村は豊かになったと言っているのに、実はそうではないという欺瞞を暴露し、また、民衆のための政府だという理想を掲げながら、現実とはなっていないことを描写するだけである。そうではないというのは、つまり今までと変わっていないからである（先の王の批判を参照）。一つ象徴的な例を挙げれば、金花が嫁いだ周村の幹部の手ぬぐいがある。彼は腰に手ぬぐいをぶら下げている。それは実は戦争の時、共産党が日本兵のまねをしたところから始まった。これは、統治者が変わってもやることは変わっていないことを象徴していると考ええる。そして、そのような幹部に対して、農民も、怒らずと恐いお上として、以前と同じように対応するのである。

だから、突き詰めて考えれば、この小説は反共にとどまらず、中国社会自体を批判するものになるのではと思える。と言うのは、この小説から導き出せる、共産党の批判されるべき性質とは、結局、厳しい農民搾取だけである。ただし、それも朝鮮支援のためということになっている（p.54）。このようなことは、中国歴代政府（近くは、汪政権、国民党政権）に見られたことである。だから、この小説の共産党を国民党に変えても、まったくそのまま通用するのである（先の譚大娘を参照）。⁽⁸⁾

このように考えれば、中国社会全体に対して希望がなくなるのではと思えてくる。『秧歌』の人物描写を読み解けば、「美しき伝統的中国VS悪しき共産党」というような単純な図式は出てこないはずである。その点で『秧歌』には希望が見い出せない。だが、そこ

に現代日本人も引きつける深みがあるのではないかと考える。

先に、張愛玲の初期の短編小説は、理想と現実の乖離がポイントになっていると言った。それは、『秧歌』にも見て取ることができる。まず、共産党の欺瞞がある。理想とする施策と現実の施策とはまったく違う。また、大きな枠組みでは、統治者と被統治者の乖離がある。政治はある意図（理想）を持っているが、民衆は自分の立場からそれを受け取る。両者が一致することはないのである。

登場人物について言えば、金根と妹は、互いに思いあっているが、お互い相手が大変な時には、何の助けもできない。お互いに家族を背負っているからである。顧岡が農村の現実に直面してどうしようもないのも、理想と現実の乖離である。知識人が農村に行って農民にとけ込むというのは絵に描いた餅であって、両者は理解し合うことができない。

また、『秧歌』では「幻のようだった」という表現がよく使われる（宋明煒1996:p.247）がそれも空想世界と現実の複雑な関係を暗示するものだと私は考える。

④秧歌という題

秧歌とは、もと田植え歌から発生した民間歌舞芸能であった。それが、「文芸講話」で、文芸は政治に従属するものであり、人民大衆を題材に、人民大衆のためのものでなければならないとされてから、積極的に推進された。

この秧歌を題にしたことについて、夏志清は、伝統中国が共産党によって曲げられた象徴と見る。単純に言えば、「伝統中国＝善VS共産党＝悪」という対立を見るのである。だが、すでに述べたように、『秧歌』ではそのような対立図式はない。そのような単純な対立図式は張愛玲がもっとも嫌うものである。それでは、『秧歌』という題名にはどのような意味が込められているのであろうか。ここで、『秧歌』本文に表れた秧歌を見てみたい。

本文では、4カ所に秧歌が登場する（p.89, 102, 124, 187）。7、8章では、農村での秧歌の練習が描写される。ここでは、「南中国ではこのような動作は滑稽であった」と述べられていることから、この村では違和感のあるものとして登場していることがわかる。民衆は進んでやっているのではなく、やらされているのである。だが、「彼女（月香）は疲れていた。だが、ふわふわとして、ある異様な興奮を感じる」ものでもあった。11章では、農民会議（と言っても共産党主導

なのだが)で、人民解放軍に年賀をする時に秧歌を練ることが決定される。そして、最後に暴動鎮圧後、予定通り秧歌を先導して年賀の儀式が行われる様が描写される。秧歌は、暴動によって死亡者が多数出たため、足並みがそろっていなかった(「参差不齊」)。だが、それでも行われ、本来参加すべきでなかった老人まで取り込まれる。最後に民衆の代表と言うべき譚大娘が熱心に踊る様子が描写されている。

このような描写から、私は、秧歌は盲目的に突き進む大衆(あるいは共産党政権、広く言えば世の中)を象徴しているのではないかと考える。⁽⁹⁾

まとめ

以上、『秧歌』は農民暴動を素材にしており、まさに反共物だというマントを着ているが、実は多くの紙幅を人物描写に費やしていること、その人物描写と反共という表面的主題とが一致するものでないことを述べた。ここから、私は以下のような結論を導き出す。

・夏志清らの言うように、深みのある反共小説とは言えない(その深みと反共とは結びつくものではない)。

(10)

・反共という面からは、いわゆる反共八股と言うべき非常に浅薄なものである。

・だが、その矛盾を起こしている人間描写に普遍的価値がある。

張愛玲の作品は、すべて生活のために書かれたものであり、社会に受け入れられる素材をマントとして登場した。あるいは、それが読者を引きつけたかもしれない。だが、彼女が力量を発揮したのは、清濁合わせ持つ人間、理想と乖離する現実を描き出した点であった。彼女の小説が時代と地域を越えた普遍性を獲得しているのはこの点であろう。だが、前者のマントと内容面がうまくかみ合っていないのではないかとと思われる。この点は『秧歌』に顕著であるが、あるいは彼女の小説全体に共通する特徴かもしれない(少なくとも、筋が最後であわただしくなるという特徴は「金鎖記」「傾城之恋」など多くの作品に見られる)。そうして、そうすれば『秧歌』も他の張愛玲の小説と共通の性格を持っているということになる。この点は、今後の課題としたい。

あとがき

最後に、門外漢と言うべき私がこのような文章を書いた動機について述べておきたい。先に述べたように、

私はたまたま手にして張愛玲の小説を読んだ。それと同時に、張愛玲についての研究を調べてみたが、非常に違和感を持った。その多くは、中国文学史上、張愛玲をどのように位置づけるかに汲々として張愛玲の本質をとらえたものではないと感じたからである。例えば、張愛玲を女性のアイデンティティ(または中国人としてのあり方)の追求者とみたり(藤井省三1991, 邵迎建1993, 1995)、外的環境が張愛玲文学の性格を決定したとみるような論などである。それらは、「中国」「文学史」という呪縛を受けているように思った。

確かに、張愛玲の小説にも、何らかの時代性、地域性が反映されているのは当然だ(私は筋など主に外面的枠組みにおいて、それが反映されていると見る)。だが、それが張の小説の本質ではない。それらによっては、張愛玲の小説が、どうして、時代、地域を越えてファンを引きつけるのかという点が全く説明できないからだ。

張愛玲の小説の本質は、普遍的な人間性を描いた点にある。「文学」という基準に照らしてみた場合、それは当たり前のことであろうし、張愛玲の小説がその基準でみた場合どの程度のものなのか、今の私にはわからない。だが、文学作品を文学としてではなく、その他の面からレッテルを貼る風潮(現在も含む)がある中、張愛玲の作品は貴重である。それは、上海の淪陷区という、政治、また正統文学史の呪縛から解放された状態にして初めて可能であったかもしれない。一方、『秧歌』はその呪縛が張愛玲に迫ったことを感じさせる。張愛玲は結局アメリカに行くしか仕方なかったのである。

今後張愛玲研究が盛んになるのではないと思うが、私はその研究が張愛玲を束縛するものにならないことを願う。張愛玲に、自分の「理想」をかぶせるのではなく、張愛玲の「現実」を見る研究が出てくることを願う。この文章は、そのような研究を目指す方々に、張愛玲の一読者の感想として読んでいただければ幸いである。

注

- 1) 張愛玲が外国人をステレオタイプとしてではなく相対化して描くことについては、浜田麻矢1997が詳しい。浜田はその理由を、張愛玲の受けた教育(特に英語力)と英米の地位低下という時代状況に求めている。私は、張が登場人物に外国人を多く用いた(外面)のは、環境の影響があるだろうが、その描いた外国人が普通の人間と描かれている(内面)ことにはその影響はないと考える。つまり、そういう人間観を持っていたから、外国人を描いてもそのようになったということではないのか。

- 2) 張愛玲の弟張子静は、母にアメリカ人のボーイフレンドがおり、張愛玲もそれに気づいていたためであろうと言う（張子静1996:p. 95）。
- 3) 「我的天才夢」（もと1939年雑誌『西風』の懸賞作文。『張看』所収）では、母は自分を淑女に育てようとしたのに、自分は、その意に反し生活無能者になっただけだと自嘲している。これも張愛玲自身における理想（思惑）と現実の乖離の一例である。
- 4) 実は、張愛玲から『秧歌』を送られた胡適が、民衆の飢餓を描いた文芸作品として高い評価を与えているが、これについては後で触れる。
- 5) 『中央日報』1995、9、11に、陳若曦が「張愛玲はどうして『秧歌』『赤地之恋』のように共産党の実情を描き出せたのか」と尋ねると、『秧歌』を連載した雑誌『今日世界』の編集長であったマッカーシーは「それは我々が材料を提供したからだ」と述べたとある（陳若曦1995）。これをもとに、金文京1996は、次のように言う。
- 作者自身は「あとがき」の中で、五〇年代初の『人民文学』の記事などにヒントを得たと称するが、元来この作品は彼女が香港で勤めたアメリカ新聞社の刊行する『今日世界』に英文で連載されたもので、当時その責任者であったリチャード・マッカーシーが素材を提供し、その意を受けて書かれたことについてはほぼ確実な証言がある。…『秧歌』執筆の動機が渡米を有利に導くためであったことは、ほぼ疑いを容れないであろう。
- 6) 宋明煒は、張愛玲の作品の特徴として、生活のために書いたという点を挙げる（宋明煒1996:p. 135）。
- 7) 逆に、魯迅の小説について、張愛玲は中国人の悪い面を暴露した点を評価している（水晶1973:p. 28）。
- 8) 『赤地之恋』はより露骨な反共小説だと書いたが、だから台湾で歓迎されたかというそうではない。共産党員の言葉としてだが、蒋介石をののしる部分（同書p. 160）があるため、長らく出版されなかった。だが、張愛玲本人はそんなことには極めて鈍感であったと言う（彭樹君1996）。ちなみに、私が台湾当局であれば、p. 252の「おまえは台湾に行っても前途がない、台湾にも本当の自由はない」という文句の方が気になるだろう。
- 9) 『赤地之恋』にも秧歌が登場する（p. 10, 58）。また、張は「談跳舞」（『流言』所収）で日本映画『阿波おどり 鳴門の海賊』のラストシーンで群衆が踊り狂う様を印象的に記している。踊る民衆のパッション、盲目性を表す点で、あるいは秧歌に通じるか。
- 10) 小西甚一1967によれば、作品には「作者が書きたい何か＝意図、それが作品に表れたもの＝志向、志向の思想内容＝趣意、趣意の焦点＝主題」がある。これに基づいて考えれば、『秧歌』は意図と志向が結びついていないことになる。

参考文献（年代順）

<中国>

- 糜文開 [1954] 「読張愛玲の秧歌」
（『中央日報』1954、10、17・18所収）
- 司徒衛 [1954] 「張愛玲の秧歌」
（『婦友』1954、『五十年代文学論評』1979所収）
- 夏志清 [1957] 「評秧歌」（『文学雑誌』2・6所収）
- 水晶 [1973] 「蟬一夜訪張愛玲」
（『張愛玲の小説芸術』大地出版社所収）
- 馬叔礼 [1977] 「試評秧歌」（『中外文学』5・105所収）
- 王曉明 [1995] 「張愛玲文学模式的意義及其影響」
- 辛一寬 [1995] 「時代的騙局—対張愛玲至今為人喜読現象的一次解謎」
（以上2篇『明報月刊』1995、10所収）
- 陳若曦 [1995] 「講究文字 馬虎自己的張愛玲」
（『中央日報』1995、9、11所収）
- 張子静 [1996] 『我的姊姊張愛玲』時報文化出版企業
- 宋淇 [1996] 「私語張愛玲」
- 殷允芃 [1996] 「訪張愛玲女士」
- 彭樹君 [1996] 「瑰美的伝奇・永恒的停格—訪平鑫濤談張愛玲著作出版」
（以上3篇、蔡鳳儀編 [1996] 『華麗与蒼涼—張愛玲記念文集』皇冠出版社所収）
- 宋明煒 [1996] 『張愛玲伝—浮世の悲哀』業強出版社
- 司馬新 [1996] 『張愛玲与頼雅』大地出版社
- 黄康顕 [1996] 「張愛玲の香港大学因縁」
（『香港筆薈』8所収）
- 余斌 [1997] 『張愛玲伝』晨星出版社

<日本>

- 小西甚一 [1967] 「分析批評のあらまし—批評の文法」
（『国文学 解釈と鑑賞』1967、5所収）
- 藤井省三 [1991] 『浪漫都市物語 上海・香港'40S』J I C C 出版局
- 浜田麻矢 [1992] 「張愛玲—上海一九四〇年代の都市小説作家」（『東亜』305所収）
- 邵迎建 [1993] 「『伝奇』の世界—アイデンティティ危機の文学」（『日本中国学会報』45所収）
- 邵迎建 [1995] 「張愛玲『金鎖記』論—一つの視角」
（『東方学』89所収）
- 金文京 [1996] 「張愛玲」現象を評す」
（『しにか』1996、4所収）
- 浜田麻矢 [1997] 「『洋場』の『洋人』—張愛玲小説の外国人」（『中国文学報』54所収）